

県央史談会史跡めぐり

高座郡寒川町の相模海軍工廠と周辺の文化財

令和4年(2022)7月10日 午前程

神奈川県内には太平洋戦争中、日本海軍の兵器製造などを行った海軍工廠が座間(高座海軍工廠)と寒川(相模海軍工廠)にあった。高座については、前回5月に探訪したが、今回は相模海軍工廠を訪ねる。当時、工廠作業員や製品などの輸送を担っていたが、現在は廃線となっている旧相模鉄道(相模線)の支線跡や周辺の文化財として、鎌倉時代に当地を所領していた梶原景時の館跡などを見学する。

寒川町の歴史(昭和19年まで、寒川町ホームページから抜粋)

- 縄文時代 縄文中期の大集落が形成される(岡田遺跡)
- 弥生時代 町内各所で生活が営まれる(大蔵東原遺跡、倉見才戸遺跡、宮山遺跡、高田遺跡など)
- 古墳時代 大(応)神塚が築造される(5世紀)
- 平安時代 承和13年(846) 寒川神社が初めて朝廷から位をもらう(続日本後紀)
承平年間(931~38) 「寒川」の地名が初めて文献に登場する(和名抄)
- 鎌倉時代 梶原景時が一宮に館を構える
正治2年(1200) 梶原景時が駿河国で滅亡する
- 戦国時代 大永2年(1522) 北条氏綱が寒川神社を再興する
- 江戸時代 元禄13年(1700) 大岡忠相が下大曲村の領主になる
享保20年(1735) 田沼意次が小動・岡田村の領主になる
- 明治時代 明治6年(1873) 学制の発布により5つの学校が開校
明治22年(1889) 11か村が合併して寒川村が発足
- 大正時代 大正10年(1921) 相模鉄道茅ヶ崎-寒川間が開通する
大正15年(1926) 相模鉄道寒川-倉見間が開通する
- 昭和戦前期 昭和6年(1931) 宮山駅が開業する。厚木-橋本間開通、全線開通
昭和15年(1940) 町制を施行、寒川町になる
昭和19年(1944) 相模鉄道を国が買収し、相模線となる

海軍工廠

第2次世界大戦前、日本海軍の艦艇・各種兵器の製造・修理、兵器の保管などを行った海軍の工場などの総称。横須賀・呉・佐世保・舞鶴の4海軍工廠と日中戦争・太平洋戦争下に戦力増強のため設立された9海軍工廠をいう。豊川(愛知県 S14.12.15)、光(山口県 S15.10.1)、鈴鹿(三重県 S18.6.1)、多賀城(宮城県 S18.10.1)、相模(神奈川県 S18.5.1)、第一火工・第二火工・化学実験、川棚(長崎県 S18.5.1)、沼津(静岡県 S18.6.1)、高座

(神奈川県 S18.5.1)、津 (三重県 S17.3.15) (『国史大辞典』)。

相模海軍工廠 資料 1・2・3・4・5

帝国海軍唯一の化学兵器工廠。防毒兵器 (防毒面・防毒衣・酸素マスク・除毒剤)、特薬兵器 (イペリット・催涙ガス・クシャミガス)、焼夷兵器 (焼夷弾弾子・三式通常弾・手投火炎瓶)、発煙兵器 (発煙筒)、防空兵器 (防空気球・防空風) を製造した。

工場は、総務部・第一火工部・第二火工部・化学実験部・会計部に別れ、主用兵器は第一火工部で焼夷弾 (三式通常弾)、第二火工部でイペリットを製造。作業員は、徴用工、朝鮮人、学徒動員など。学徒動員は、湘南中学 (湘南高校)、日川中学 (日川高校)、豆陽中学 (静岡県立下田北高校)、平塚高女 (平塚江南高校)、伊東高女 (伊東高校)、甲府高女 (甲府西高校)、都留高女 (都留高校)、横浜第一高女 (平沼高校)、厚木高女 (厚木東高校)、上溝高女 (上溝高校)、平塚市立高女 (高浜高校) などから行われた。宮前寮 (現在の寒川中学校のところで) で生活した。

昭和 20 年 1 月から、地下壕を掘るため 120 名の朝鮮人労働者が収容された。5 月頃に八王子の川口村に南多摩分廠の建設を始め、相模工廠の疎開が行われ、福島、長野などにも疎開した。8 月 6 日にはグラマンによる機銃掃射も受けた。

防毒マスクをかぶって作業をしていた工員は、戦後もその後遺症に苦しめられ、平成 13 年 (2001 年) にようやく国による救済措置が講じられるようになった。

イペリットはマスタードガスの別名で、第一次大戦のベルギーのイーブル戦線で初めて使用されたことからそのように呼ばれる。マスタードガスは洋カラシの臭気を放つことから付与された。皮膚をただれさせるびらん剤に分類される。平成 14 年 (2002 年)、相模海軍工廠跡の相模縦貫道建設現場、平成 15 年 (2003 年) 平塚市の合同庁舎建設現場 (海軍技術研究所化学研究部跡地) で作業員が被災。(『相模海軍工廠』『相模海軍工廠―追想―』『寒川町史研究』第 6・32 号)。

海軍化学兵器沿革

大正 11 年 (1922) 艦政本部に担当部員を置く

大正 12 年 (1923) 海軍技術研究所研究部第二科燃料研究室を化兵研究室に改変

関東大震災により技研全焼

昭和 5 年 (1930) 平塚出張所を開設、移転

昭和 8 年 (1933) 特薬製造実験工場等の建設 (平塚)

昭和 9 年 (1934) 技術研究所化学研究部に昇格 (平塚)

昭和 12 年 (1937) 隣接民有地買収、特薬庫、火薬庫、特殊化兵研究室等増築 (平塚)

昭和 17 年 (1942) 昭和産業寒川工場を買収、技研研究所造修部設置 (寒川)

昭和 18 年 (1943) 相模海軍工廠に昇格 (5 月 1 日 開廠式) (寒川)

昭和 19 年 (1944) 建物間引解体、物資の洞窟疎開、疎開分廠

昭和 20 年 (1945) 米軍接收 (8 月 25 日引渡目録)

相模線 資料 1・2・6

相模線は大正 10 年 (1921)、茅ヶ崎―寒川間で開通した。相模川の砂利を積みだすために造られた。寒川駅から一之宮方面へ四之宮支線があり、西寒川駅も砂利積み出しのための駅であった。川崎・鶴見海岸の埋立て、道路・橋梁の建設、氾濫防止河川改修のため必要とされ、関東大震災の復興用資材としての砂・砂利需要の増大が拍車をかけた。戦時中に昭和産業という会社ができ、旭ペンベルグが延岡から昭和 13 年 (1938)、大豆のタンパクから人造羊毛を作るパテントを昭和産業に買い上げられ、製造部門の人間が寒川へ集められた。軍服の製造にあてられた。製品や従業員を運ぶようになったが跡地に相模海軍工廠ができ、その工員を乗せるため、朝晩だけ客車が走っていた。蒸気機関車が 2 両ほどの客車を引っ張っていた。西寒川駅の先、四之宮駅は昭和 19 年 (1944) 国有化に伴い廃止された。(『寒川町史』16 別編ダイジェスト、「広報えびな」、『寒川町史研究』第 6・24 号)。

明治 31 年 (1898) 6 月 東海道線茅ヶ崎駅開業

大正 4 年 (1915) ^{いとうきよのすけ}伊藤里之助 (茅ヶ崎町長)、鉄道免許申請を鉄道院へ提出

4 月 7 日、茅ヶ崎町、高座・津久井 2 郡関係村々、八王子町の有力者が「相模軽便鉄道」発起人会を東京都芝区白金町の衆議院議員岡崎久次郎方で開催したのが始まり

大正 5 年 (1926) 6 月 茅ヶ崎～寒川～倉見～厚木、厚木～橋本、寒川～四之宮の免許

大正 6 年 (1917) 12 月 18 日 相模鉄道株式会社を創設。本店茅ヶ崎町茅ヶ崎、資本金 60 万円、社長 ^{おかざききゅうじろう}岡崎久次郎、取締役 伊藤他 5 名、監査役 ^{うだきちごろう}宇田吉五郎他 2 名

大正 8 年 (1919) 7 月 砂利採取側線設置・採取販売兼営認可

大正 8 年 (1919) 11 月 香川駅予定地にて起工式。茅ヶ崎～寒川着工

大正 10 年 (1921) 10 月 茅ヶ崎～寒川開通

大正 11 年 (1922) 5 月 寒川～四之宮の営業開始

大正 12 年 (1923) 2 月 寒川支線、東河原駅開業

大正 15 年 (1926) 寒川～倉見 (4 月)、倉見～厚木 (7 月) 開通

昭和 4 年 (1929) 7 月 厚木～橋本工事着工

昭和 6 年 (1931) 4 月 厚木～橋本開通

昭和 14 年 (1939) 10 月 寒川支線、東河原駅が昭和産業駅に改称

昭和 17 年 (1942) 10 月 寒川支線、昭和産業駅が四之宮口駅に改称

昭和 18 年 (1943) 4 月 神中鉄道 (現在の相鉄線) を吸収合併。相模鉄道相模線と相模鉄道神中線となる

昭和 19 年 (1944) 6 月 首都圏戦時輸送体制強化のため国有化 (相模鉄道相模線のみ)、寒川支線、四之宮口駅が西寒川駅に改称。ここから四之宮駅間が廃止され、西寒川駅が終着駅となる

昭和 39 年 (1964) 橋脚・沿岸保護のため相模川砂利採取全面禁止

昭和 59 年 (1984) 3 月 31 日 寒川支線、西寒川駅廃止

『新編相模国風土記稿』によれば相模国内に五つの大山街道があったといい、その内の一つである田村通り大山道の相模川沿いの不動堂。東海道藤沢宿から辻堂村の四ツ谷から一の鳥居をくぐって赤羽根村そして田村の渡しを通過して大山へ向かう主要な街道である。

堂内には木造不動明王座像と制吒迦・^{せいいたか}・^{こんがら}矜羯羅童子が鎮座、江戸期の作。道標は「右大山道」「左江戸道」「江戸浅草黒船町、大黒屋伝四郎、同久右衛門」「天明六（1786）丙午載九月吉日」、風土記の記載は元田村（対岸の平塚市）にあったといい、元不動堂というところ。力石は「奉納 江戸深川 六十貫 明和元年」。他に双体道祖神（『寒川の文化財』『藤沢市史』）。

梶原景時館址

梶原景時（？—正治2（1200）.1.20）は相模国住人、桓武平氏五郎景清の子。通称平三。鎌倉郡梶原郷（鎌倉市）が本領。治承4年（1180）の石橋山の戦で大庭景親に属しながらも源頼朝の危急を救い臣従し、源平合戦で多くの功績をあげた。屋島の戦では源義経と作戦上の問題で対立し、義経を頼朝に^{ざんそ}讒訴し失脚させた。弁舌巧みで京都的な素養も優れ、頼朝に重用され、正治元年（1199）頼朝死後に組織された宿老13人による合議制の一人となったが、^{ゆうきともみつ}結城朝光を新將軍の頼家に^{ざんげん}讒言したことから、有力御家人66名の弾劾により鎌倉から追放され、所領の相模国一之宮（寒川町）に退去した。翌年、甲斐の^{たけだありよし}武田有義を擁して謀反を企て上洛の途次、駿河国（静岡県）^{きよみがせき}清見関付近で在地の武士に襲撃され、景時以下長男景季、次男景高、三男景茂の一族は敗死した（『朝日歴史人物事典』、『神奈川県史』別編1人物）。

伝梶原七士の墓

正治2年（1200）正月、梶原景時一族郎党が一之宮を出発、上洛の途中討死してしまったので、一之宮の留守居役であった家族、家臣らとその者達を弔ったという説や景時父子が討死してから、しばらく景時の奥方を守って信州に隠れていた家臣七人が、世情が変わったのをみて鎌倉に梶原氏の復権、所領安堵を願い出たが許されず、七士はその場で自害し、それを祀ったものともいわれる（『寒川の文化財』）。

^{えびら}箴の梅 ^{かじわらかげすえ}梶原景季（1162～1200）は、景時の子で、源太、左衛門尉。養和元年（1181）頼朝の寝所の宿直を命ぜられ、元暦元年（1184）宇治川合戦では義経に従い、佐々木高綱と先陣を争い、平家追討にも功があった。文治元年（1185）頼朝と義経が不和となると上洛して義経の動静を探った。同5年（1189）奥州征伐に即興で^{のういん}能因法師によせて一首を読む風流の一面をもつ。箴の梅の伝説は、能の「箴」（古くは「箴の梅」）、浄瑠璃「ひらかな盛衰記」、新歌舞伎「箴の梅」（岡本綺堂作）などに取り入れられた。『源平盛衰記』によれば、一の谷の戦いで景季は箴に梅の花の枝を挿して奮戦、坂東武者にも雅を解する者が

いると敵味方問わず賞賛を浴びたという(『神奈川県史』別編1人物、『演劇百科大事典』)。

一之宮八幡宮 (八幡大神) 資料6

『新編相模国風土記稿』一之宮村の項に「若宮八幡宮 妙光寺持」とある。祭神は
誓田別命ほむだわけのみこと以下八柱。元禄10年(1697)の創立と伝えるが、梶原景時館の鬼門除けと
の説もある。また、平安時代の『和名類聚抄』に「左牟河波伊知乃三夜牟良」(さむかわ
いちのみやむら)とあることから、古くから奉祀されていたとも推定されている。明治
11年(1878)、琴平社、天神社と境内社の荒神社、稻荷社が合祀された。

一之宮八幡大神屋台しんしん神賑行事(町指定重要文化財) 八幡大神の例祭(8月第一日曜)
の宵宮に行われる行事。一之宮の東・西・北の3町の屋台が各町内から出発し、太鼓、
笛、鉦等による囃子にのって八幡宮をめざして巡行、宮入する。明治初期、各町内の浄
財により造られ始まったという。(『寒川の文化財』)

景観寺 窪田山 天台宗 資料6

天平宝字元年(757)創立と伝えられ、『新編相模国風土記稿』に「窪田山と号す、天
台宗、大住郡一の沢浄発願寺末、本尊十一面観音。鐘、明和七年(1770)八月鑄造」と
ある。本尊十一面観音立像は室町時代の作と推定され、町指定重要文化財である。